

【問題18】 2群間の差を統計学的に検定する際に、有意差が得られやすくなる要因はどれか。

1. サンプル数が少ない.
2. 検出力の設定が大きい.
3. データの妥当性が高い.
4. 群内の標準偏差が小さい.
5. 順序尺度のデータである.

【解説】

有意差とは、2群のデータの差を比較するときなど、偶然に起こったことではない差であることを示すときに使われる。有意差が出やすくなる場合は、以下の場合である。

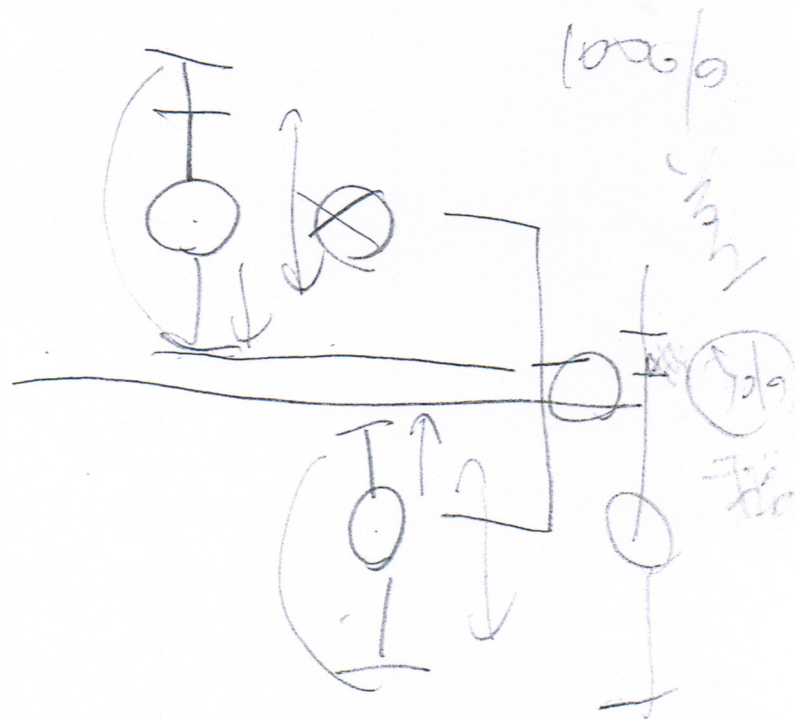
①標本サイズが大きい場合

→比較する集団の標本サイズが大きく、平均の差が小さい場合は有意差が出やすい

②平均の差が大きい場合

→比較する集団の標本サイズが小さく、平均の差が大きい場合は有意差が出やすい

1. サンプル数が少ないと言うことは、標本サイズがし委細ということである。よって、有意差は得られにくい。
2. 検出力の設定が大きいということは、



【文献】

【正解】 4

【問題9】用語の説明で誤っているのはどれか。

- 1. オッズ比：ある現象の起こりやすさを示す尺度
- 2. 第1種の過誤：棄却すべき帰無仮説を棄却しない誤り
- 3. メタアナリシス：複数の研究データを統合して全体の結論を導き出す方法
- 4. バイアス：曝露とアウトカムを誤って評価してしまう研究デザインの不備
- 5. 無作為比較試験：ランダムに割り付けた対照群間で前向きに効果の差を比較する試験

【解説】

- 1. オッズ比とは、治療介入効果などに関する一尺度であり、疫学調査などに用いられる。罹病を例に挙げると、ある条件下にあるある人がその条件下にない人に比べ何倍その病気になりやすいかを示す確率のことである。よって、オッズ比とは、ある現象の起こりやすさを示す尺度であると言える。
- 2. 第1種の過誤とは、帰無仮説が正しい場合にそれを棄却する誤りである。例えば、真（本当）は差がないのに、差があると判定する誤りなど。  
帰無仮説が正しくない場合にそれを棄却しない誤りは第2種の過誤である。  
よって、棄却すべき帰無仮説を棄却しない誤りは第1種の過誤ではなく、第2種の過誤である。
- 3. メタアナリシスとは、系統的（システマティック）レビューの1つの形式で、独立して行われた2つ以上の臨床研究の結果をまとめるための統計学的手法である。個々の研究では標本数が少ないため統計学的に正しい結論が出にくいような場合に有効な方法であり、EBMにおいて多用される。よって、メタアナリシスとは、複数の研究データを統合して全体の結論を導き出す方法であると言える。

4. バイアスとは、例えば2つの実験上の手続き間の系統的な誤差、あるいはそれによって生ずる統計量の偏りのことである。よって、バイアスとは、曝露とアウトカムの関係を誤って評価してしまう研究デザインの不備であると言える。

5. 無作為化比較試験とは、対象者を実験群（研究群）と対照群（比較群，コントロール群）とに無作為（ランダム）に割り付け比較する実験方法である。薬物・外科手術・検査・処置・教育・理学療法技法などの医学的介入の効果を判定するための最も信頼される方法である。よって無作為比較試験とは、ランダムに割り付けた対照群間で前向きに効果の差を比較する試験であると言える。

偽差  
 への  
 対比の効果を  
 Participants  
 に、対比以上の質  
 を与える環境  
 ADHIS  
 対照群を分ける。

【文献】

1) 奈良勲：理学療法学事典。医学書院。東京。2006。p99, 618, 726, 730

【正解】 2